



## 宮入慶之助記念館の歩み

会員 宮入 建三

### （1）研究施設へごあいさつに

宮入慶之助記念館活動が始まって20年が経過しようとしています。記念館だよりを基本にして、これまでの歩みを辿ってみます。記念館は、1999（平成11）年11月に開館しました。「宮入慶之



▲開館当初の記念館外観



▲開館日に取材を受ける宮入耕一郎初代館長

助の業績を末永く顕彰し、各収蔵資料を展示、公開、説明、保存に努め、そのことを通じ社会の発展に寄与する」という気持ちが込められていました。

開館した記念館は、まず、関係する諸施設へのご挨拶に伺いました。どの施設からも、温かい励ましのお言葉をいただき、協力を約束していただきました。九州大学医学部からは、日本住血吸虫

の標本。久留米大学医学部からは、ミヤイリガイの標本をご提供いただきました。目黒寄生虫館は、民間の運営とは云え、とても明るく大きな施設で、寄生虫館が若者達のデートスポットになっていました。寄生虫をテーマにした施設の運営方法についての貴重なお話を伺うことが出来ました。

麻布大学寄生虫学教室は、ミヤイリガイの飼育に苦心して飼育槽のなかにどのような“水辺”環境を形成したら良いか、ミヤイリガイの餌は、どんなものを配合させれば良いか等の研究が進められていました。どこの施設もミヤイリガイの継体飼育には苦心しているようでした。麻布大学には、国立感染症研究所の二瓶直子先生が居られました。広島大学医学部寄生虫学教室の岩永襄先生は、ミヤイリガイの飼育方法については特別の技術をお持ちのようでした。

山梨県衛生公害研究所からは、ミヤイリガイ標本、日本住血吸虫症との闘いの武器としたポスター、小冊子等を提供いただき、さらにミヤイリガイの生息地へも案内していただきました。山梨県甲府市立病院の林正高先生には、診療の大変忙しいなか、お時間を割いていただき、貴重なお話を伺うことが出来、後日ミヤイリガイのアジア各地で採集された標本を提供して下さいました。

### （2）記念誌の発刊

2003（平成15）年は、ミヤイリガイ発見から90年目に当たります。「住血吸虫症と宮入慶之助—ミヤイリガイ発見から90年—」を発刊致しました（2005年11月）。

日本住血吸虫症については、日本は安全な状



況になり、その研究成果は海外の有病地の治療・予防に役立てられ、日本の研究者は海外各国で活躍しています。

記念誌では現在に至るまでの日本住血吸虫症とミヤイリガイに関する研究の状況と成果、宮入慶之助の業績と生涯についての記録等を収録しました。

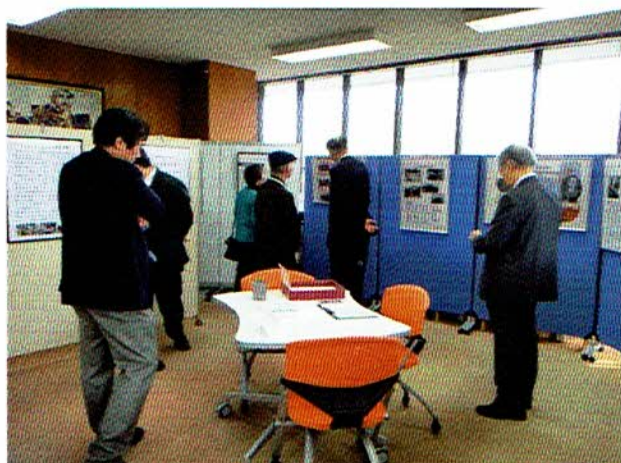
### （３）開館 10 周年記念展示と講演会

○展示会 慶之助の生誕地である長野市松代町地区にある松代藩時代からの建物、松真館で開催された展示会では、慶之助の人物像とミヤイリガイの発見、世界初の日本住血吸虫症安全宣言に至る歴史、現在の寄生虫問題等、説明パネル約 50 枚、資料約 40 点の展示を実施しました。期間中地元を中心に東京からも併せて 140 人余りの方々が来場されました。其の殆どの方が郷土出身である宮入慶之助のことは知らなかったという感想でした。

○講演会 長野駅近くのホテルサンルート長野東口で開催された開館 10 周年記念講演会では、「住血吸虫症の現在を考える」というテーマでこの分野ではトップクラスで活躍されている、林正高、太田伸生、石井明、多田功の各氏にお願いしました（記念館だより 12 号 2010 年 3 月）。

### （４）ミヤイリガイ発見 100 周年記念イベント

日本住血吸虫の生活環が解明され、ミヤイリガイを駆除することで長く苦しんでいた地方病から解放されることが慶之助の発見で明らかにされました（1913 年）。従って 2013 年は、ミヤイリガイ発見 100 周年になります。このミヤイリガイ発見 100 周年記念企画イベントには、当記念館も積



▲九大「日本住血吸虫中間宿主発見百周年展」

極的に取り組みました。画期的な規模で取り組まれた 100 周年記念企画イベントが宮入慶之助の研究の舞台であった九州大学医学部キャンパスで 100 周年企画を締めくくることが開催できたことは誠に意義深いことでした。

### （５）記念館活動の反響・反応

記念館活動を続けていて様々な反響が寄せられますが、それらのうちの 2 例をご紹介します。

○1 例目は、記念館の広場からです（記念館だより 8 号 2008 年 3 月）。

2007 年 6 月、松本から K S 氏が来館され、館長が尋ねてみると、「中国在住の私の友人が日本住血吸虫に罹ってしまい、苦しんでいます。有効な治療法は？」等々、切実な訴えが次々と述べられました。K S 氏は、その後さらに詳しい友人の治療現況を連絡してきて、「少なくとも 3 年前に罹患、2 回入院をした。（略）現在は漢方で、胃、肝臓の治療を受けている。その後駆虫する予定。」と。

記念館としては、大切な問題と考え、すぐに多田功名誉館長、石井明特別顧問と、林正高先生にも経過を含め報告し、アドバイスを依頼しました。「日本住血吸虫は一对の成虫から毎日約 3000 個の卵を 3 年間産み続ける。検便で虫卵を見つかり血清検査で濃厚感染が証明されれば、速やかにブラジカンテルなどを経口投与し、駆虫する必要がある。まず駆虫が第一なので、早急に専門医に受診をおすすめします。」との連絡が入りました。三氏の情報は、早速 K S 氏に連絡されました。関係者一同、K S 氏の今回の一途な想いが、良い結果を得られるように切望しています。

記念館活動に於ける反響の 2 例目（記念館だより 27 号 2019 年 3 月）は、

○2018（平成 30）年 11 月 29 日、おはなし読み聞かせが篠ノ井東小学校で行われました。各クラスは、始業前 20 分間ほどでしたが、紙芝居形式で行われ、東犀南の方々が中心に活動する四つ葉のクローバーの会によりおこなわれました。この紙芝居には、ミヤイリガイ宮入慶之助のこと、そして日本住血吸虫症のこと等々がやさしくわかりやすいように描かれています。記念館としては大変有り難いことです。次代へ継承され、長く語り継が

れることを願っています。

## (6) 記念館の運営

記念館開館当初は、ミヤイリガイや日本住血吸虫の標本や慶之助のゆかりの品、書籍・写真類等収集が進み、筑後川地方、片山地方、山梨県の主要流行地域におけるミヤイリガイ撲滅対策の歴史についての記録資料等がそろってきました。

機関誌「宮入慶之助記念館だより」は、2001(平成13)年1月に発行開始し、ホームページ開設も2001年1月のことでした。どちらも不慣れなパソコンを使っての“手づくり”でしたが、これらは、相互の情報交換を円滑にし、活動を記録できる重要な手段となり、記念館活動を保障するものとな



▲手づくりの「記念館だより第1号」

りました。収集資料の整理収納を進めながら、それぞれの節目での記念イベントに取り組みました。マスコミには、出来る限り連絡するよう心がけました。

地元の役員さんや会員さんのがんばりが運営の大きい力となっていました。また、宮入源太郎元館長の現役時代の職場の友人達は、元館長の記念館活動への並々ならぬ決意に心打たれて、支援の手をさしのべてくださいました。

NPO法人化は、2008(平成20)年2月4日付けで法人登記を完了しました。展示、イベント、研究、広報、収集事業に携わるメンバーを募り、体制作りが急がれました。

記念館へ直接訪れる来館者もいらっしゃいました。地元の学童や、県内外の研究者他多くの階層の方々が来館されました。

## (7) 宮入源太郎館長が宮崎一郎奨励賞を受賞

開館以来、NPO法人化、記念誌発刊、そしてミヤイリガイ発見から100周年記念企画展は、かつてない規模で取り組まれました。東京の上野にある国立科学博物館で、曲がりなりにも、100周年記念イベント開催に關与出来たことは心強いことでした。

そして、寄生虫問題については、いわゆる無関心な地域と考えられた長野県北信地方に新しい風が吹いたのではないかと思います。宮入源太郎元館長は、地元会員が圧倒的に人手不足な中、奮闘され、それぞれの企画を成功に導きました。多田功九州大学名誉教授には、数多い難題を的確なアドバイスで助け船を出していただきました。

2015(平成27)年4月には、九州大学医学部寄生虫学講座同門会の第20回宮崎一郎奨励賞が宮入源太郎元館長に授けられました。授賞テーマは、「宮入慶之助先生の業績記念と寄生虫問題の社会への提示」でした(記念館だより22号 2015年4月)。



▲九大宮崎一郎奨励賞受賞式にて

以上、宮入慶之助記念館の歩みを辿ってみました。関連資料の収集に携わったひとりから見た記念館活動の一端を述べさせていただきました。

慶之助は本郷菊坂の独逸学校で7、8か月独逸語を学んだあと、明治13年(1880)12月に東京大学医学部予備門(予科)五等乙に入学します。

明治10年(1877)に東京医学校と東京開成学校が合併して東京大学が創立し、医学校は医学部と改称されます。医学部本科は5年制で、予科は明治6、7年度は2年制、8年から3年制、10年度からは予備門の2年が増設されます。予科の5等と4等が予備門で甲、乙に分かれ、各々1年で予備門は各4年の課程となっています。従って、正規には卒業までに予備門4年、予科3年、本科5年の12年を要することとなります。

慶之助は明治13年(1880)12月に予備門(予科)五等乙に入学し、翌年には予備門(予科)四等乙に進級しています(『東京大学医学部一覽明治13-14年』)。これは予備門(予科)五等において同年度に乙から甲に飛級して翌年に予備門(予科)四等乙に進んだことを意味します。同じく予備門(予科)四等においても乙から甲に飛級

して翌年予科三等に進んでいます。

慶之助は東京大学医学部および帝国大学医科大学の予備門(予科五等・四等)を2年、予科三等から一等を3年、本科を5年の計10年を要して、明治23年10月に卒業しています。山極勝三郎は慶之助と同じ明治13年(1880)12月に医学部予備門(予科)四等甲に飛級で入学、予備門(予科)四等から予科二等に飛級し、予科3年、本科5年の8年で卒業しています。

予備門・予科・本科ともに各学期末の5月と11月の後半に期末試験があり、その成績如何によって進級・留年・退学ということになります。また、医学部予科は明治15年(1882)6月に大学全体としての予備門に合併吸収されます。

大学は冬半期(12月から5月)と夏半期(6月から11月)の2学期制で月曜日から土曜日までの朝7時より12時までの5時間限授業が行われていました。予備門(予科五等・四等)では習字や算術、分数などの基礎学習が設定され、予科三等から一

官入慶之助 東京大学・帝国大学医学部予備門(2年)・予科(3年)・本科(5年)履修科目一覽

\*教科内容は東京大学医学部一覽(明治十三-十四年)より記載

帝国大学医学部					東京大学医学部						等 級
本科 明治二十三年 卒業	本科 明治二十二年 一等生	本科 明治二十一年 二等生	本科 明治二十年 三等生	本科 明治十九年 四等生	本科 明治十八年 五等生	予科 明治十七年 一等生	予科 明治十六年 二等生	予科 明治十五年 三等生	予科 明治十四年 四等生	予科 明治十三年 五等生 入学	等 級
卒業試験 合格次第	外科各論 内科各論 病理各論 外科臨床講義 外科眼科学 外科臨床講義	外科各論 内科各論 外科臨床講義 内科各論	外科各論 生理學 外科總論 生理學 内科總論 実地演習	物理學 實地解剖學 化學	物理學 動物學 化學 解剖學	獨逸語學 動植物學 羅甸語學 代數學	獨逸語學 博 物 學 代 數 學 幾 何 學	獨逸語學 算 術 地 理 學	文法 問題 分 數 地 理 學 和 漢 學	讀方 習字 級字 算術 和漢學	冬半期 (十二月から五月)
学位授与式	外科各論 内科各論 病理各論 外科臨床講義 外科手術実地演習	外科各論 内科各論 外科臨床講義 病理各論	外科總論 製劑學 解剖學 實地演習 毒物學 分析學 實地	物理學 顯微鏡用法 化學 生理學	物理學 動物學 化學 各部解剖學	獨逸語學 動植物學 羅甸語學 代數學 對數 三角術	獨逸語學 博 物 學 代 數 學 幾 何 學	獨逸語學 算 術 博 物 學	文法 小 數 地 理 學 和 漢 學	讀方 文法 分 數 作 文 和 漢 學	夏半期 (六月から十一月)

等に独逸語学と羅匈語学（ラテン語学）の科目が履修されています。本科では物理学、解剖学、組織学、外科、内科、生理学、眼科学などの基礎医学全般の履修科目が設定され、ドイツ語での講義が行われていました。

慶之助の在学時に在籍したドイツ人教師にはベルツ（内科学・

婦人科・病理学・組織学・生理学・薬物学）、ディッセ（医学）、デーダーライン（動植物）、グロート（独逸語）、ランゲ（医学）、ランガルト（製薬化学）、シェンデル（数学・物理）、スクリーバ（外科学）、ヴェルニヒ（内科学・産婦人科学）などがいました。



▲慶之助の帝国大学医科大学卒業證書

卒業試験は各人が申請し、各科目の卒業試験に合格次第、各人に證書が授与されます。慶之助は明治23年10月31日に卒業證書が授与され、「医学士」の称号が授与されています。

明治13年12月	医学部医学予備門（予科）五等乙（第一年）に入学する。途中で乙から甲に飛び級する。
明治14年12月	医学部医学予備門（予科）四等乙（第二年）に進級する。途中で乙から甲に飛び級する。
明治15年12月	医学部医学予科三等（第三年）に進級する。
明治16年12月	医学部医学予科二等（第四年）に進級する。
明治17年12月	医学部医学予科一等（第五年）に進級する。
明治18年11月	医学部医学予科一等（第五年）を修了する。
明治18年12月	医学部本科五等（第一年）に入学する。
明治19年12月	帝国大学医科大学本科四等（第二年）に進級する。
明治20年12月	帝国大学医科大学本科三等（第三年）に進級する。
明治21年12月	帝国大学医科大学本科二等（第四年）に進級する。
明治22年12月	帝国大学医科大学本科一等（第五年）に進級する。
明治23年10月	帝国大学医科大学本科一等（第五年）を修了し、卒業する。

▲宮入慶之助／東京大学入学から帝国大学卒業までの10年の経過

※通常：予備門4年 予科3年 本科5年の12年を要する。

## 新収蔵資料 ～慶之助明治期ほかの絵葉書～

埼玉県春日部市の丹野廉三氏から慶之助直筆の絵葉書など72通を寄贈していただきました。丹野廉三氏は慶之助の長女加久子が嫁いだ村山達三氏の親戚筋にあたる方です。村山家から資料を引き継ぎ、保管されていました。

72通のうち海外からの絵葉書55通の分類。

- ①明治31年4月から32年3月まで、慶之助はスペインマドリッドでの万国衛生及デモクラフィー会議に政府委員の一人として参加し、その後欧州各国の調査をしますが、スペイン・ロシアなどから日本の葛城義方などに出した絵葉書29通。
- ②明治35年5月から37年8月まで、ドイツに留学した際にドイツから葛城義方などに出した絵葉書18通。
- ③明治39年4月から5月まで、台湾台北台南に調査に行った際に葛城義方、宮入華子に出した絵葉書4通。 ▲慶之助の帝国大学医科大学卒業證書



▲東京下谷区徒町の葛城義方宛て（表面）

④大正8年9月から9年3月まで朝鮮総督府の命令でエジプトに寄生虫調査に行き、その後欧州各国に調査に行った際にイギリス・オランダ・エジプトから葛城家に出した絵葉書3通。

⑤大正12年2月から6月までアメリカロックフェラー財団の招きで医学教育視察のためアメリカ等に行った際に葛城家に出した絵葉書1通。

絵葉書は、訪問先のこと、近況、これからの行先など様々なことが記されています。

葛城義方は、慶之助の妻志ゆんの父、慶之助の義父、宮入華子は慶之助の妹はなです。絵葉書の宛名から慶之助の妻、妹、子どもたちが義父の家に同居していたことが窺い知ることができます。内務省衛生局の頃の住まいがどこであったかなどがわかってきます。明治期の慶之助関係資料はほとんど収蔵してなかったのが、貴重な資料となってきます。



▲明治31年4月20日フランスマルセイユからの絵葉書（裏面）

## 編集後記

○1999年（平成11年）11月27日に開館して、今年には20周年の記念の年になります。記念事業として、11月16日（土）に記念講演会を開催することとなりました。詳細は講演会案内パンフレットをご覧くださいと思います。20年を経過しても記念館の存在自体がまだ知られていないこともあり、記念館の立地する地区、隣接地区、慶之助の生まれた松代町西寺尾地区に記念講演会の案内を全戸回覧することとしました。少しでも慶之助の事、記念館の事を知っていただければと思っています。

○前宮入源太郎館長の弟建三氏に開館20年を回顧していただきました。開館時の詳細を知る唯一の人と

なりました。

○本年3月末に多数の絵葉書を寄贈していただきました。資料の少ない時期の慶之助直筆の資料であり、これらを通じて新たなことがわかってきました。

### 宮入慶之助記念館だより 第28号

発行者 特定非営利活動法人宮入慶之助記念館

編集者 山口 明

〒388-8018 長野市篠ノ井西寺尾 2322

Tel&Fax 026 (293) 4028

HP：《宮入慶之助記念館》で検索

発行日 2019年（令和元年）10月18日